

武蔵野日曜聖書講筈

キリストの無者

——マタイ伝第5章3節、7章7～11節——

1982年1月10日

小池辰雄

鍵の言葉 我ならざる我 我執 十字架という門 十字架で無者 本当の自由 あるがまま投げ入れる 心に太陽を キリストと二重写し 四位一体 求めるのはキリスト 無条件の世界 塾の精神 そこに本ものがあるか 根源現実 聖霊を賜わらざらんや 一如の世界 棄て所 本当に大変なひと 絶対に死なない

【マタイ5】

³ 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。

【マタイ7】

⁷ 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。⁸ すべて求める者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。⁹ 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、¹⁰ 魚を求めんに蛇を与えんや。¹¹ 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求める者に善き物を賜わらざらんや。

●鍵の言葉

今日は、私の信仰告白をいたします。題して「キリストの無者」です。いわゆる山上の垂訓、マタイ伝5章のところを開いてください。

³ 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。

これは「無の神学」の鍵の言葉です。要するに、これが結論なんです。

「幸福」とは「恵まれたるかな」ということ。ギリシヤ語の「マカリオイ」というのは「いわゆる幸福という言葉ではなく、「祝福」という言葉です。ヘブライ語なら「バールーク」です。「心」は「霊」という字で、一番大事な字です。ヘブライ語の「ルーアツハ」、ギリシヤ語の「プニューマ」です。

「霊が貧しい」

というの

「自分を何ものともしない」



ということ。魂が貧しい。即ち、私が無い、無私です。「天国」とは、キリストにとつては神さまです。「神の支配するところ」というのが「天国」(バシレイア)という言葉です。神の現在したもうところ、それが天国です。そういう事態がその人のものであると言う。

キリストは自分を告白していらつしやる。「垂訓」ではない。山上の大告白です。お釈迦さんも、キリストも、自分の全存在に、全身に溢れていることを言っているだけのはなしで、いわゆる「教えよう」としているのではない。

「人に教えよう」

なんていう意識は二段構えの意識でダメなんです。

「私は恵まれた。自分を何ものともしなくしたら、神さまが私の中に入ってきた」

ということ。そんな註解は、私は他で見たことはない。私はこれを御霊で示された。

キリストは、なるほど、自分を何ものともしなかった。これは本当にそうです。

「善き先生」

と言われたら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。善きものは神さまの他にない」(マルコ10・

18)

と仰った。それから、ヨハネ伝にも、

「私は何も教えない。神さまが言えということと言っているだけのはなしだ。

私は何もできない。神さまがさせているんだ」

と。だから、何もできない。無為、無教、無善。要するに、キリストはあらゆるものが無いんです。牧師さんたちはそんなことをはつきり言わない。神さまの子だから何でもできると、ただ直線的に思っている。ところが、キリストは何もできない、無為者、無教者、無善者です。だから私は、キリストのことを「無者」という。キリストが神の無者なんです。神さまが100%で、自分は0なんです。

「100=0、0=100」

ということ。100よりかむしろ∞(無限大)がいい。無即、無限無量です。

このことに気がついて私はびつくりした。この山上の大告白の第一言が身についたら、正直、私は畳にぶつ倒れたよ。これが鍵で、もう、キリストの言葉が全部読めてしまった。これは秘訣なんです。

「けれども、人格があるじゃないか」

とか、そんなことを言っているひまはない。

「それは変てこな神秘主義だ」

なんて。何を言っているか。キリストは最大の神秘家です。



●我ならざる我

お釈迦さんが

「天上天下唯我独尊」
ゆいがどくそん

と言いました。あの「我」は自分という我ではない。これは「梵我」(アートマン)なんです。即ち「宇宙の大霊」がああ「我」なんです。

「宇宙の大霊に即した我ならざる我、それだけが尊い」

と。お釈迦さんは自分が尊いと言っているのではない。そこに彼は本当に入ってしまったから。生まれて何日かたつて叫んだとかいうのは神話でしょう。けれども、お釈迦さんの教えを煮詰めてみれば、お釈迦さんの教えもそこに帰するわけだ。

これは誰でもがそうなれるんです。最高最深の真理は、万人がそこに入れる。なにか条件がなければ入れないようなものは本当の世界ではない。無条件です。これも無なんだ。

ところが、時々キリストが躓くことを仰るからね。

「信仰うすき者よ」

なんて仰るものだから、

「これは信仰を厚くしなければならぬ」

と、一生懸命でみんなやるんだね。ご苦労さんな話だ。キリストがああいうことを仰って困るよね、本当は。そうすると、

「信仰を厚くしなくてはいかん」

と思う。そうではない。信仰に絶すればいい。自分の信仰なんか、絶信すればいい。信仰も私したらダメなんです。絶信の信ということ。この信は上からくる。親鸞の『歎異抄』がこれです。賜りたる信ということなんです。

この無の世界に入ると、もう世界中の真理がよく見えてきます。およそ、偽りならざるものはちゃんと映ってくる。空気は見えないでしょ。空気は見えないけれども、空気は満ち満ちている。空気に囲まれ、空気を吸って、我々の肉体は生きています。我々の肉体で一番大事なのはこの気だもの。「空気」とは素晴らしい言葉だ、空なる気だ。漢語というのは素晴らしい。もう少し漢語の本当の意味をつかまえていかなければいかん。肉体もこの気によって生きている。いわんや、魂は神の靈気によって生きている。これが即ち「聖霊」「プニユーマ」「ハギオン」です。

キリストは自分をゼロにして、何ものともしなかった。無者です。そうしたら、神さまが一切となる。だから、

「我を見し者は父を見しなり」(ヨハネ14・9)

「父と我とは一つなり」(ヨハネ10・30)

と言った。私はああいう言葉を見ると、もう、たまらない。「父と我とは一つなり」とは、聖書の中で一番短い節です。私たちは、



「キリストと我とは一つなり」
と、これにならなければダメなんです。そうすると、
「さあ、大変だ」
ということになる。なにも、これは大変ではない。一つになったって、我々は罪びとだから。

●我執

「罪びと」というのは、なにも
「この行ない、かの言葉が悪い」
ということではない。それは枝葉にすぎない。要するに自我というやつ、我執というやつがある。これが「罪」なんだから、我執そのものが。
「万人は罪びとなり」
というの

「万人は我執の人なり」
ということだ。中世の神秘家が、

「私という言葉——英語でアイ、マイ、ミーという——から去らなくてはダメだ」
というようにことを言っているところがある。やむをえず、「私」ということを言います。けれども、「私」にとかく執るから、「私」が立つから、エゴイズムだから、万人はエゴイズムなんだ。

「エゴイズムの人である」
ということとは、

「罪びとである」
ということだ。神さまを立てないで、自分を立てている。

神さまとの繋つながり切れてしまっている。ラテン語の「レリギオ」(宗教)というの、「再び結び返す」(レリガール)という言葉からきている「再結」という言葉なんだ。「宗教」という言葉は、

「再結を、結び直しをしなければダメですよ」
という言葉なんだから、おもしろいよ。神さまとの結び直しは、人間は直結できないんだ。どうしても、自我が立つ。だから、そこに中保者が道をつくってください。これがキリストです。結び直しのまん中にキリストがくる。

「神—キリスト—我」
という繋がりです。

●十字架という門

キリストは



「我は道なり」

と仰つた。どういふ道か。また、

「我は門なり」

と言われた。どういふ門か。日本人は道の民です。茶道、弓道、柔道、剣道と言う。真理を身に体することを道という。「我は門なり」というのに、私はこういう字を自分でつくつた（門の中に十を書く）。十字架という門です。十字架という門に体当たりして、そこにぶつ倒れると、向こう側に行ける。十字架の門を通らなければ、向こう側に行けない。詩篇23篇みたいな素晴らしい、緑の野、憩いの水汀みぎわには行けない。

「十字架の贖い」というのは、キリストは十字架で私を完全に贖ってしまった。新約聖書の「ヘブル書」というのは、ヘブライ人に旧約聖書の預言しているところの宗教の事態、キリストが全部これを全うしたんだということを、贖罪の角度から書いてあるわけです。ヘブル書9章に、

「¹²山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の

贖罪を終えたまえり。」（ヘブル9・12）

とある。「山羊と犢との血を用いず」とは、昔はそういうことをやった。大祭司が年に一回、至聖所で祈って、山羊や犢を屠ほふって、執り成しをしていた。それを今度は、キリスト自身が羔こひつじとなり、キリスト自身が大祭司となって、十字架にかかった。

「己が血をもて只一たび至聖所に入りて」

とは十字架のことです。

これは宗教的天才が十字架に懸かつたのではない。キリストは十字架に懸からないうで、いきなり天界へ行けたひとです。旧約のエリヤやエノクよりもっと素晴らしい、いきなり天界へ行けたひとですよ。

「エノクの齢は都合二百六十五歳なりき。エノク神と偕ともに歩みしが神かれを

取りたまいければおらずなりき」（創世記5・23～24）

なんて書いてある。エリヤは火の車に乗って天界へ行ってしまった。キリストはいきなり霊化して——変貌の山で霊化したでしょ——そのままスーツと天界へ行けたんですよ、キリストは。あの時は、エリヤとモーセが現れてきた。

けれども、キリストは特別な死に方をしなければならなかった。極悪人となって、十字架に懸かつた。キリストは罪びとの首かしらとなった。パウロは

「我は罪びとの首」

と言つたが、本当の罪びとの首はキリストです。キリストは罪びとの首となって、十字架に懸かつてしまった。だから、私たちの全存在はここに贖われてしまっているわけです。もう、無罪者になつていて。罪無き者にされているんだ。

相対的人間小池なんてものは死に到るまで罪びとにすぎない。けれども、その奥に、私は



もう無罪の世界を、罪無きところを絶対恩寵でいただいているんだ。私たちはそういう二重構造です。これは仕方がない、地上にあるかぎり。だから、ドラマチックなんです。何が「組織」だと言った、「組織神学」なんか。これは「ドラマ」です。私自身がドラマを自分でやっている。躓いたり、転んだり。しかし、前進せざるを得ない。必ず前進して行きます。

●十字架で無者

十字架という贖罪は、過去の罪も、現在も、将来の私も全部贖われてしまっているから、こんな有難いことはないじゃないですか。私は十字架で無者にされている。

「キリストの無者」

と言うのは、

「キリストの十字架によって無者にされた者」

ということですよ。

「なかなか私は無の境地に入れません」

なんて、何を言っているか。そんな禅宗みたいな悟りの世界ではない。これは悟りよりもっと凄い。これは絶対恩寵なんです。十字架で無者にされているのを「キリストの無者」と言うんだ。皆さん、それでも何か問題があるでしょうか。「でも」と、誰か言えますか。

「でも、私のこれはどうだこうだ」

と。そんな「でも」なんていうのは全部、すつとんでしまったんだ、この十字架で。本当にそのことを深く受けとらなくてはね。

みんな——「みんな」と言っては悪いけれども——私自身も長いこと、信仰が観念的だった。思われた世界だった。思われた世界はダメなんだ、悪くはないけれども。観念信仰だ、無教会でも。無教会の信仰のすじはいいんだよ。けれども、観念なんだ。

「教会だ、無教会だ」

と、そんな相対的なことを言っているうちはダメだ。内村先生は「無教会」という一つの歴史的な使命を果たした。ところが、無教会に固守してしまって、妙な殻ができて、パリサイになってしまったから、私は出た。御霊をいただいたから、出てしまった。無教会とというのは、十字架をこつち側からだけ見ている。これは思われている世界だ。「罪が贖われている」という命題を信じているだけだ。

「我れキリストと共に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず。キリスト

わがうちに在りて生くるなり」(ガラテヤ2・22)

とパウロが言った。「キリストわがうちに在りて」とは何ですか。

「御霊のキリストが、キリストの御霊が私の中で生きている」

ということ。パウロはそれだから、凄いことになった。パウロはもともと十字架に反対していた。クリスチャンを迫害し、殺したようなやつだった。だから、パウロはやり切れな



いから、

「我は罪びとの首」^{かしら}

なんて言っている。けれども、すっかりキリストと一つになったから、

「エン・クリスト（キリストの中に）」

の世界に入ってしまったから、

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

と、何回も彼はそのことを言っている。パウロの書簡の中に164回書いてあるそうだ。ダイスマンという学者が数えた。それくらい、キリストと一つになった。

● 本当の自由

現実のパウロは罪びとにすぎない。けれども、

「私はもうキリストのものだ」

と。だから、

「キリストの僕、キリストの囚人」^{めしうど}

とまで彼は言った。捕らわれたる者、囚われ人だ。ところが、キリストという驚くべき無限無量の囚人となると、これは本当の自由なんだ。この囚人が一番の自由なんだ。今は普通、民主主義で、自由なんて言っているが、あんなものはひとつも本当の自由ではない。政治でも経済でも教育でも何でも、全部、基に宗教という根っこを持たなければ、ひっくり返ってしまう。

無限無量なるものだけが自分を捕まえているという世界が本当の自由です。自分が質的に無限無量になるから。相対的人間小池は、我々は、決して無限無量ではないですが、質的には無限無量です。質的には完全をいただいている。量的ではない。

「キリストの無者」というのは、

「キリストの十字架によって、贖いによって無者にされた者、それは同時に無限無量者である」

ということ。何もものにも囚われない。

我々はみんな一人ひとり、賜りたる才能、資質がある。天賦天職ということ。それを神の、キリストのものとして――ただ「として」ではない――キリストのものとなって、これが動き出す。そうしたら、その芸術も、その学問も、その仕事も、老若男女にかかわらず、みな凄いことになっていく。それに目覚めて、そこにキリストの力をいただきなさい。御霊をいただいでみる。そうすると、凄いことになるから。

● あるがまま投げ入れる

「自分の信仰」なんてことを何も考えなくていい。キリストだけです。「祈る」というのは、



「お願いする」ことではない。祈り入る、

「全存在をキリストの中にあるがまま投げ入れる」

ことです。あるがまま投げ入れることは、十字架があるからできるんです。あるがまま、この十字架の門の下にぶつ倒れて、向こう側へ行つてごらん下さい。そうしたら、もう素晴らしいことになるから。どんどん変化が起きてくる。楽しくてしょうがない。

だから、福音なんです。なぜ、キリストは福音なのか。キリストの言葉を見てみると、誰もこれにかなわないですよ。及第できない。キリストの言葉はそういう激しい言葉なんだ。ところが、御霊をいただくと、御霊のキリストの中に入ってしまうと、それが楽しい力強い言葉に変わっていく。

福音の受けとり方が、およそ私が育った無教会でも観念であつたから、ダメなんだ。すじだけはいいい。すじだけではダメだ、血が通っていないければ。悪口を言っているのではない。私はただ自分の過去を言っているだけのはなしです。あなた方は、二十歳代でこの世界に入ったたら、大変なことになるから。遠慮しないで、どんどん進んでください。

こんな素晴らしい世界を——使徒たちはその世界からものを言っている——いわゆる神学は七面倒くさいことにしてしまつた。本当の世界は非常に簡単なんです。

●心に太陽を

キリストは太陽だからね、私は国旗（日の丸）を元日、二日、三日とちゃんと掲げておいた。

「あれはとんでもない国粋だ」

なんて、そこらの人は思つたかもしれないけれども。私は日本の国旗は世界一だと思つている。国旗において私はキリストを思っているんだから。どうして、日本人はこんな素晴らしい国旗を重んじないか。自分自身が日本の旗にならなければ。掲げなくなつていいよ、本当に旗になれば。

「心に太陽を持て」

というドイツ人の詩もあるとおり。そうしたら、影がなくなるわけです。

法然が、

「どうしても煩惱の影がとれないで困る。ちょうど、形に影があるごとく、その煩惱が取れない」

と言つた。彼はとうとう「南無阿弥陀仏」になつた。キリストは、

「汝らは世の光なり」

と言うが、

「御霊の光を、光の御霊をうちに持て。そうしたら、影がなくなつてしまふぞ」

ということですよ。そうだよ、光が中にあるから、影がなくなつてしまふ。外から光がきたら、影ができてしまふ。



「ああ、太陽はいいなあ」
 なんて見て見ているだけではダメなんだ、太陽と一つにならなければ。花を見れば花となり、太陽を見れば太陽となり、雲を見れば雲となる。そういうような柔軟なたましいにならなければ、宇宙的になれない。

●キリストと二重写し

要するに、私たちはキリストと二重写しのようになることだ。

「我を視よ」

と、ペテロもパウロも言ったでしょ。あの「我を視よ」というのは、

「我のうちなるキリストを視よ」

ということ。キリストの御名が本当に霊的な力を持っていますから、あしなえ跛者が立つてしまったり、牢屋で繋がれていた鎖が取れてしまったり、大変なことです、あの使徒行伝は。みんな本当ですよ、あれは全部。聖書の現実には文字の内側から呻き叫んでいます。聖書は、単なる

「どういう意味だ」

なんていう世界ではないですから。

「自分が何も無い、自分は何ものでもない」

というところに本当に入るのは、この十字架によつて、無者とされるから。こだわりがなくなる人になる。老子の「無為」の世界です。そうしたら、本当に自由自在になる。何を讀んでも、グーツと読めてきてしまう。また、その限界がわかるし、それを伸ばすこともできるし、不思議なことになる。キリストというひとは内容が無限無量だから、「愛」なんて言っても、ただ「愛」ということばかりではないですから。概念で捕らわれてはダメです。十字架で完全に砕かれてしまった。そうすると、聖霊が私の中に突破して入ってきた。聖霊の突破突入です。そうすると、無限無量の包摂の世界に入る。すべてを包んでしまう。分け隔てをしない。それが本当の愛です、にな荷いんです。敵をも愛することができます。みな、荷い上げの世界です。もの凄い力を持っていますから。

「何々せよ、何々すべからず」

なんてことは言う必要がないんだ。

「私がお前の中に入って、そうさせてやるよ」

ということ。福音はそうです。文字の、言葉の奥の世界を、その言葉を破ってつかまえていかなければダメです。破るような捕まえかた。ところが、

「御言、御言」
「みことば」

といって、言葉に執着して、意味の詮索ばかりやっている。ご苦労さんはなしだ。そんなことばかりしたら、くたびれてしまう。



●四位一体

いいですね。そういうのが、私が到達した無の事態なんです。無と言うと、なにか虚無かと思うけれども、そうではない。自分が無くなってしまうから、キリストがやってくるから、

「我とキリストとは一つなり」

ということになる。三位一体さんみと言うけれども、これは本当は四位よんみ一体なんです。信仰の現実では四位一体です。誰もそんなことは言わんだろうな。

「神—キリスト—聖霊—我」

というのは、御霊が全部これをなしたもう。キリストの十字架がその土台を私たちに与え、その第四番目は十字架がつくつてくださっている。

そして、「十字架と聖霊」は絶対に切ることはできません。本当に十字架されれば、必ず聖霊はくる。十字架ぬきの聖霊はあぶない。ヘタすると、サタンにひっくり返される。傲慢になる。絶対にこれは不可分であるということ、その構造を本当に言っている人を、ほとんど私は見たことがないんで嫌になってしまうね。それはやっぱり本式に体験しなければ、そのことはわからん。

「体験」とは主観ではないですよ。「主」はキリストのほうだからね。こっちは「客」なんだから。主客一如の世界に入ってしまう。あなた方はこれだけお聞きになっただけでも、もう楽しくてしょうがないでしょ。福音なんだから。何か知らんけれども、自分が抜けてしまつて、キリストがうちに生きてくださる。本当に十字架の中に祈り入ってくださいよ。

「エホバに帰れ、帰れ」

と預言者たちが言っている。これは帰入です。私は入の字を必ず入れる。「イン、の中に」の世界に入らなければダメなんです、外では。そういう「中に」の世界に入る。そうしたら、飄々ひょうひょうたる人間になる。こだわらない。風の行くままに。

「風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処いずこより来り何処きたへ往くを知らず。すべて霊によりて生るる者も斯かくのごとし」(ヨハネ3:8)

とキリストが言った。「何処より来り何処へ往くを知らず」ごとき姿がああ「飄々」という字だ。

●求めるのはキリスト

マタイ伝7章7節に、

「7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば

開かれん。求めよ、然らば与えられん。」(マタイ7:7)

とある。キリストは告白していらつしやる。キリストは、

「神さまを求めた。そうしたら、神さまが与えられてしまった。神さまを尋ねたら、



見いだしてしまった。神さまという門を叩いたら、開かれてしまった」と。もともと、そういうことです。キリストは自分の体験で、そのまま言っているんですから。神さまは必ず、与えられ、見いだされ、開かれる。私たちにとっては、求めるのはキリストです。

「キリストを求めなさい」と。そうしたら、必ずキリスト自身が与えられる。何かをくださるのではない。キリスト自身が与えられる。これは至宝ですから。キリストの他に比べられるものは絶対にありません。キリストをいただくんです。

キリストを尋ねれば、必ず見いだす。福音書にきて、キリストを尋ねてください。「神さまはどこだ。神はあるかないか」

なんて、何を言っているかと。あなた方、学生は友人に言ってやるといい、

「福音書を読め。このキリストにおいて神を見なければ、もう問答はしないぞ。福音書のキリストを見て、そこに神を見ないやつは、いつまでたっても神は見えないんだ」

と、それだけのことをはつきり言えなければダメです。

だから、福音書は「アルファでオメガ」なんです。「始めにして終り」です。キリストという門を叩いてごらんください。必ず開かれる。そして、これは狭き門だから、十字架という狭き門は、何も持つて入ることができない。裸で体当たりする。そうすると、向こう側は詩篇23篇みたいなところですよ。

「なんじわが仇のまえに我がために筵をもうけ、わが首にあぶらをそそぎたもう。わが酒杯はあふるるなり。」(詩篇23・5)

これは、

「わが首に聖霊という油をそそぎたもう。我という酒杯はあふるるなり」ということですよ。

一流の神学者が私の『詩篇珠玉集』(小池辰雄著作集第四巻)を読んでびっくりしたんだ、正直。「我という酒杯が聖霊で溢れてしまう」

ということですよ。これはみんなキリストです。キリストは何も、「何を」求めよと言ってない。求めるのは「私をだよ」ということが隠れている。

「我は門なり」

とキリストは言ったんだから。

「私を尋ねなさい。必ず私は私自身をお前にやるよ。私という門を叩きなさい。必ず開いて、お前を天国的な現実に入れてやるぞ」ということです。



●無条件の世界

8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見だし、門をたたく者は開かるるなり。

と、キリストは無条件に言っている。

「こういう場合には、こういうものを」

と言っていない。無条件の世界です。断言的で無条件的な言い方です。

モーセの十誡もそうだ。「殺すなかれ」ではない。本当は、

「お前は殺人はしない」

という言葉なんだ。あれは「くなかれ」ではない。「くせず」です。

「私がお前の神だから、殺人なんかお前はできっこない」

というのがモーセの十誡の本当の意味です。それをユダヤ人はとりそこなっていていわゆる律法にしてみました。パウロも律法をそこまで読まなかったね。律法をその奥で読んだのはキリストだけです。

親が子を信頼しなかったら、どうするんですか。また、子が親を信頼しなかったら、どうなるんですか、親子の関係が。条件の関係ですか、無条件でしょ。神と私たち人間との関係はもつと凄い無条件の世界です。だから、本当は、

「すべし、すべからず」

ではないんです。

「律法は隠れたる福音である」

ということも私は書きました。読み方が違うぞと。もともと、信じてものを言っているんだ、神さまの方は。私たちの側はどんなであろうと、神さまの方で信じぬくから、それでこっちは参るんです。人が

「人間というものは信じられない」

とよく言うね。相手を信じぬいてごらん。逆に相手が救われるから。

相対的な現実でものを考えているから、いかん。次元の違ったところから見えないと。本当は相手にならない。天下無敵になる。これはありがたいね。無となると、そういう境地に入るんだから。

私の『無の神学』はだいたい誤解されるだろうね。第一に、わからないんだ。わからなかったり、誤解されたり、いろいろだろう。結構です。逆に、

「そんなに簡単にわかってたまるか」

と言いたい。しょうがないやつだね、私は。皆さんは簡単にわかりますか。「わかる」と言ったって、頭じゃないですよ。

●熟の精神

私は学校を自分で建てて、自分が理事長になって、自分が校長になれば、もの凄い教育が



できたんだけれども、私はそういう立場でないから、齒に衣きぬを着せざるを得なかった。今は、吉田松陰とか、佐久間象山とか、ああいう連中の「塾」の精神が一番大事なんだ。日本は、もう学校なんかみんなやめてしまつて、本当の塾をつくると一番いい。大改革をしなければならぬ。乱暴な話だけれども。そんなことは現実にはできないけれども、それだけの精神がいるんです。

いいですか。若い方々は、

「自分の生涯をかけて、これを私はやるぞ」

と、目的をはっきり持つて、使命感を持つて進んでごらん。御霊の力はもの凄いことになるから。

「御霊を持つものは人に学ぶ必要はない」

と、ヨハネ書簡にも書いてあるとおりの。私があるの言つたつて、私が語るのと、あなた方が聞くことは同じことなんです。上からきているんだから。

地上の試験なんか及第したつて、落第したつて、いいよ、そんなことは。問題は、神さまの学校で本当の及第者になつて、そして進んでいくこと。敗れたと思つたら、それは本当の勝利者であつたと。しかし、このキリストの知恵と力によれば、凄いことになりますから、ご心配ないです。

佐久間象山、坂本龍馬、西郷南洲、日本には素晴らしい魂の先輩がいますが、それをキリストの光で見てごらん。そうすると、凄いことになっていくから。何を讀んでも、何を見ても、全部これで消化してしまふ。包摂してしまふ。おおよそ、パリサイ的なものとは違ふ。

●そこに本ものがあるか

「パリサイ」はなぜできるかというのと、自分の信仰とか、自分の教会とか、自分の幕屋とか、自分の召団とか、そんな小さなものにこだわっているからいかん。どうせ、人間というのは相対的な存在ですから、特殊性、相対性はある。けれども、

「その破れた相対性の中に、本ものが、無限無量なものがあるかどうか」

だけが問題なんだ。そこが本当の「宗教改革」だと私は言いたい。

「こういうようにするというのが宗教改革だ」

とは言わない。方法や形なんか、どれだつていい。問題は

「そこに本ものがあるか」

ということだけです。

ここにたくさん花がある。水仙とカーネーションは、それぞれ比較することはできない。それぞれ素晴らしい美よさを持つている。どうしてかというのと、太陽の光をみんな受けているから。同じ土から養分を吸つて、同じものを受けながら、形と姿と香と色がみんな違ふ。これでいいんです。みんな水仙だつたら、どうにもならない。これを百花繚乱りょうらんという。大



交響楽がそうでしょうが。みんな太鼓だったら、どうにもならない。

皆さんは、一人ひとりの顔がみんな違います。神さまは一人ひとりを絶対的につくっている。相対的でありながら、絶対的なものにつくっている。神さまは最高の、最大の芸術家であります。目が二つで、鼻が一つで、口が一つで、耳が二つ。みんな同じなだけども、違うんだからね、これが。指紋まで違うんだから、驚いてしまう。神さまは最大の芸術家です。

「芸術家は神にならえ、大自然を見ろ」

と言いたい。そういう、自由な、もの凄い無限な、無量な、多彩な世界です。

● 根源現実

キリストを受けとって、そのキリストの中で、今度は祈ってごらん。そうしたら、我執のない祈りになるから、その祈りは聞かれる。キリストの懐の中に祈り入って、キリストの中で祈るんです。

「未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡ふところにいます独子ひとりごの神のみ之みを顕あらわし給えり」

(ヨハネ1・18)

とヨハネ伝1章に書いてあるでしょ。キリストは神さまの懐の中に入って、そこで祈られたから、何でも聞かれてしまった。

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

とは、その根源現実のことです。

「現象に現れなかったから、私の祈りはまだ足りない」

なんて、そんなことは考える必要はない。そうすると、現象ばかり求める。徴を求める。それはダメです。御利益宗教になる。

9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、¹⁰ 魚を求めんに蛇を与えんや。

イスラエルでは石ころがパンみたいな形をしている。だから、サタンがキリストに挑みかかって、

「お前は神の子なら、この石をパンにしてみろ」

と言った。キリストはいつも自分の霊的な力を私しない。いつも神さまだ。自分はゼロ。そうすると神さまは無量大にそこに働きたもう。

「私はだいたいぶん霊的になりました。霊的な力があります」

なんて思ったら大間違い。無ほどありがたいことはない。私は空気みたいですから。

「信仰がありますか?」

と聞かれれば、

「ありません、信仰なんか」



と答える。「信仰、信仰」と言って、信仰が鼻についているようなのは大嫌いだ、ああいう妙に宗教臭いのはね。ところが、私みたいにも、本来霊的でない人間に、今までどれくらいキリストがお働きくださったかわからんですよ。これはみなキリストがなさるので、私は^{くだ}管になるだけの話です。

● 聖霊を賜わらざらんや

「然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物^{たまもの}をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わらざらんや。」

「善き物」は、ルカ伝では「聖霊」と書いてある。「善き物」とは聖霊の他にない。

私は無教会にいた時に、「聖霊」なんていう言葉はあまり聞かなかつた。

「十字架、十字架」

といて、十字架一点張りでした。内村先生はもちろん聖霊の火花の散っている人でした。けれども、聖霊が常燃の火として燃えているとは、言い得るかどうかは知らん。もし、そうだったら、内村先生はあんなに十字架ばかりおっしゃるはずはない。そこに無教会の限界がある。

どうぞ、若い方は、内村先生の文章は素晴らしいから——素晴らしいと言ったって、ただ文章がいいという意味ではない。ある力を持っています——御霊の光で読んでください。私は無教会のアウトサイダーになって、使徒たちのインサイダーになったから、はっきり言えるんです。

「求むる者に聖霊を賜わらざらんや」

ということ。聖霊は何ものとも代えることのできない宝です。世界中とも代えることができない。私から聖霊を抜いてしまったら、もぬけのからになってしまう。

十字架と聖霊は絶対に離してはダメですよ。十字架の土台にだけ聖霊は来るんですから。ところが、直接、聖霊に行くような人がいる。それはあぶない。そうすると、いつも

「ワッショイ、ワッショイ」

と祈っている。それはダメです。祈りは、何も大きな声を出さなくたっていい。黙って祈ってキリストの中に入る。一番深い祈りは沈黙の祈りです。

キリストは、「求めよ」と言うけれども、

「私はお前を求めている。だから、必ず私にぶつかるよ。私が与えるよ」

という、こつちが先です。これは本願なんです。本願の求めの方が強い。こつち（キリストの方）は彼岸^{ひがん}なんだ。本願はここに此岸^{しがん}となってくる。向こう側は彼岸。彼岸の世界が此岸の世界になる。彼岸と此岸が一つになってしまう。天国と現世とは一つになる。

「娑婆と浄土とが一つになる」

というのは仏教の方にもある。此岸と彼岸が一つになる。旧約に



「大空は大地に口づけせり」
 という言葉もある。大空と大地はやはり一つになって接している。

●一如の世界

何しろすべて本当の意味で、一如の世界に入らないものは本ものにならないです。
 「汝と我」

なんてまだ言っているうちはね。外国人は好きなんだよ、「汝と我」という意識が強すぎる。これはグンデルト先生もそう言っていた。

「日本の文章には、私という言葉が、特に古文なんか非常に少ないが、あれが融合の境地を表わしている」

と。汝が我が、我が汝かわからないような世界です。それが融合、一如、一体ということ。

「愛」なんていうと、すぐ、「エロース、フィロース、アガペー」なんて、いろいろ分けるね。あれはなにも分ける必要はない、

「愛は全部、もとは神さまから来ている」

ということだけが本当になわかつていけば。

「神は愛なり」

という。愛の現れ方は千変万化ですよ。

「神さまは不公平だ」

なんて、そうじゃない。神さまの愛の現れ方は、ある時は怒りに現れたり、不幸に現れたり、いろいろ現れ方があるんだよ。全部、神さまの愛の不思議なんだ。

それがまた、恋愛だろうと、親子愛だろうと、友情であろうと、全部これは神の愛からきている。

「人のために己の生命を棄てる。これより大いなる愛はない」

という、棄身の愛が一番とん底の愛です。けれども、現れ方が違うので、種類として分けではダメなんだ。本当の恋愛だったら、相手のために自分を棄てるだけの気持を持っているんじゃないですか。

とにかく、一如の世界から限りなく展開していく。分析総合ではない。だから、一とか無とかいう言葉が凄い内容を持っている。空とか気とか天とか。

私は「天」という言葉が好きだから、たくさん使っている。「天」という字は、もともと人間だ。人の上に聖霊の輪がかかっている。一番上の線は光の輪なんだ。光の輪は横から見れば線に見える。昔の画家が聖人の頭の上に輪を書く。光輪が本当に出るんです。

ある時、私の後ろに光輪を見た人がある。私は聖人でも何でも無い。私はしようがない野郎です。けれども、そのしようがない野郎だから、キリストは私を十字架と聖霊でもって捕まえてくださったから、ありがたくてしようがない。



あなた方は、キリストに即すると、いわゆる信仰なんていう、そんな狭苦しいものではないですから、あなた方の賜っている一番やりたいことに打ち込んでください。それを中心にして、嵐の目のように展開していく。そうしたら、凄いことになる。それだけの生き方をしなかつたらつまらんです。どこでぶつ倒れたつていいですよ。これは未完成の完成ということだ。未成交響楽みたいに。私もどこでぶつ倒れたつていいと思っっている。しかし、

「これから百歳でも突破して、やってやるぞ」

という、そういう矛盾した気持を持っている。この福音の真理を分かつためには、まだまだ、とにかく私はやらなければならないと正直、思っていますから。まあ、今に、時が来ます。皆さんも、もし、いい加減な「信仰」を持つていたなら、そんなものは棄ててしまいなさい。要らないんだから、信仰なんか。私の言い方はちよつと乱暴だけれども、気合がわかるでしょ。いわゆる整った世界はダメです。破れなさい、本式に。八方破れでいい。宮本武蔵も驚いてしまうよ。そういうのがこの福音の世界です。もう、どこを読んだつて、楽しくてしょうがないから。

●棄て所

マルコ伝8章34節、

「³⁴斯^{かく}て群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言いたもう『人もし我に従い来らん

と思わば、己をすて、己が十字架を負いて我に従え。³⁵己が生命を救わんと

思う者は、これを失い、我が為また福音の為に己が生命をうしなう者は、之

を救わん。³⁶人、全世界をもうくとともに、己が生命を損せば、何の益あらん。

³⁷人その生命の代に何を与えんや。」(マルコ8・34～37)

なんて、キリストは凄いことを言う。

「己をすて、己が十字架を負いて我に従え」

というのは論理的に矛盾している。棄てるのは、棄て所がある。キリストの中に私は自分を棄てます。「なかなか、自分というものは棄てられません」なんて、それは正直棄てられませんよ。けれども、キリストの中には、皆さん誰でもが自分を棄てられるんです。そうすると、

「十字架を負えと仰るけれども、あなたは十字架を負わしてくださいさる」

ということになる。キリストは、

「我が荷は軽し」

という。苦難を喜ぶようなことになってくる。パウロもペテロも言いました。

誰も苦難は好きではない。けれども、苦難にあたって、なお喜ぶことができるのは——ただ苦難を喜ぶのではない——苦難の中にあつても、いよいよキリストの力がくるから、



うれしいんです。苦難そのものを喜ぶのではない。キリストの力がきて、その苦難という十字架を負うことができるから、うれしいと言う。逆に力がくる。

いわゆる敵が多ければ多いほど、逆に私は力がきます。次元が違った世界に入るから。けれども、敵を敵とも思わない。

「汝を虐げる者のために祈れ」

とパウロが言った。祈れます。相手が可哀相だから。

「何を誤解しているか。今はどこにいるか」

と。私の集会から幾人も出ていきました。

「ああ、結構です、出ていくのは。私の集会は自由だから。けれども、本当にキリ

ストの中に入って生きていってください」

と言ってあげる。私は、昔集会に来ていた人たちに今度の『エン・クリスト』（1981年8

月夏季号、1981年11月秋季号——第6、第7合併号）を送った。そうしたら、びっくりして

喜んで、また手紙をくれた。私は、

「いつでもいいから、あなたは集会に飛び込んで来ていいよ。私はなにもこだわっ

ていないんだから」

と書いてやった。聖霊の世界はそんなこだわりを持っていませんから。聖霊の愛は最高の

力を持っている。だから、

「愛は一切に勝つ」

という。愛は一切を救い上げていく。

私は、こういうことをあなた方にものを言っている時には、もう、「自分なんていうものはすつ飛んでいます。「自分なんてもの」があつては、ものなんか言えませんから。そういう、始めも終わりも真ん中も全部、これはキリストです。

● 本当に変なひと

キリストというひとは本当に変なひとです。福音書を見たつて、誰が水の上を渡ることができるとですか。誰が、五つのパンと二つの魚から五千人にものを食わせることができるんですか。これは変なひとです。創造の力を持っている。これを全部、彼は

「自分は何もできない。神さまがしたんだ」

と言っているんだからね。

キリストの中に入つてしまうと、

「なんだ、今までドイツ語というのは難しいと思つていたが、こんなに易しくなつ

てしまった」

ということになる。入学試験というのは何てことはないですよ。勉強して、もの凄い把握の仕方ができて、グーッと入つて来てしまうから。



S君のお母さんが癌になって、彼は実家に祈りに行った。とうとう、祈りで癌が治ってしまった。そして、帰ってきたら、翌日が試験だ。彼は前の晩に祈った。そうしたら、明日の試験問題の出るところが目の前にスーツと見えてしまった。そして、試験で一番になってしまった。神さまは、

「成すべきことをしたら、お前を助けてやるぞ」

ということ、閃きがきてしまったんだね。奇蹟でも何でもない。霊的な法則が働くんです。どうぞ、「奇蹟」ということを言わないでくださいよ。聖意のあるところには、必ず驚くべきことが働きますから。いわゆる摩訶不思議を求めてはいかん。

どこまでも、それは聖意体现です。キリストは、

「みこころ聖意の天に成るがごとく、地にも成らせたまえ。汝の聖意を為させたまえ」

と祈るが、傍観して祈っているのではない。

「どうぞ、私をお使いください」

と提身して祈っている。これが聖意体现です。

「私はなんでもこの道を行きたい。あなたの福音の証しのために」

と、そういう無私の祈りだったら、グングン、力が入ってきますから。我々の為すことは全部、福音の証者たらんことですよ。何をしても、福音の証者たること。何をしても、神さまの証者となることです。

だから、こんな

「十字架を負え」

なんていう恐ろしい言葉も、その中に入って、本当に力をいただくと、そういった現実になれる。

「我れ既にキリストと共に十字架せられたり」

という。「死」と言おうが、「無」と言おうがいい。「死」という言葉は何かもうお終いみたいな言葉だけれども。「死」なら必ず「生」です。「無」なら「無量」です。どっちだって構わない。みんな同じことです。藤井先生が時々、私たちに言った。

「あなた方、死んでいるかね」

と。ということとは、

「本当に自分に死んで生きているか」

ということなんです。

●絶対に死なない

「永遠の生命」が生きていけば、いつぶつ倒れても絶対に死なない。原子爆弾がきても大丈夫だ。身は粉の如く飛んでも霊体が与えられる。この福音の世界は、涙を通してでも歓喜の世界に入るから、私たちは万歳というわけだ。



私は人のお骨を拾ったのが20何回だ。嫌だよな、お骨は。そのうち俺もあの中に入るのかなんて。あんな所に入らないで、どこかへ消えてしまいたいけれどもね。

これは福音の勝利です。天地相応えていきます。私の兄貴は天に召されて60年たったけれども、

「去るもの日々に疎し」

なんて、あれはうそだ。

「去るもの日々に近し」

だ。兄貴の存在は私には離すことはできない。

「救わるべき者の、わが家族及びわが親族に我一人ならざるを祈りて」

と彼の聖書の扉に書いてあった。私一人が救われた。それから、いろいろ、皆さんに波及したわけです。

これは本当に熾んなる生命ですから。「永遠の」と言っただって、ただ時間的ではない。今において常に永遠が質的に生きているのが、本当の「永遠」です。一日千年、千年一日という、そういう熾んなる事態です。いわゆる「キリスト教」なんていう、もつたいぶつたような世界ではないですから。

そういう本当の喜びの世界です。ダンテはあれだけの苦難を通して『神曲』一曲を書いて、これを「コメディア（喜劇）」と言った。あとでボッカチオが「デイビナ（聖なる）」を付けただけども。

「喜劇は終わった」

とベートーベンも言いました。本当の生命を捕まえている人間は、どんなことがあっても、絶対に屈しない。逆に、いよいよ力を得て、いよいよ歓喜の世界に入っていく。「喜びに寄す」というベートーベンの曲もあるけれどもね。

日本の経済が不況になったってそんなことはどうだっていいよ。とにかく、今年は、皆さん一人ひとりがひとつのカイロス——カイロスというのは大事な時機ということ——生涯のひとつの大事なカイロスの年として、皆さんは、

「本当にキリストの無者となつて、無限無量者となつて行きます」

と、そのはつきりしたところを掴んで進んでください。必ずその証者となれますから。それだけが、私の年頭の最後の言葉です。おわります。

